

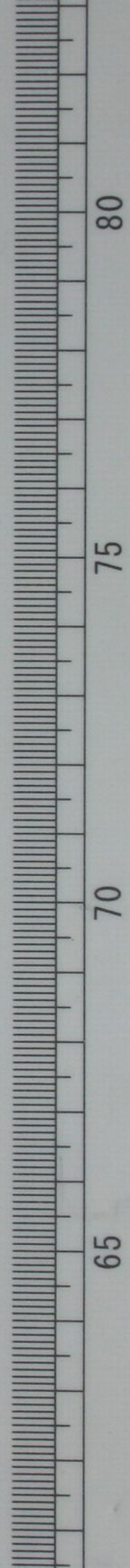


浪仁上久發句集

中村俊定文庫

文庫 18

907





元治乙丑首夏新鐫

# 浪化上人叢句集

半雪居藏版

浪化上人叢句集序

陰靜山

中村俊定文庫

飛鳥如珠之珠崑崙乃玉璫多人治之在  
待之始之實也わらたふは言のまじり  
今こそそのまじりのまじり少人我得  
世のつらさ大和の國の古き短きこの品  
この系にまじり者磯海乃中



玉をさるひにかね紙糸めて世に傳えんとも  
いとゆり浪化上人予大為十あり四母の  
佛門に淳寧院の君は季の佛子なり城の  
中國丹波の馬國ふまして法のをくしり  
云のたより能く月花ふれ山のふりそたが飛  
枝折匂の教ありそ海はれ有磯海をそ

世の人よの傳えをくしりをこの頃越の人  
野鶴ねし坐るく上人の言の意は紙糸の  
あつふも世に遠く都に來すく坐るの首ふ  
ふも世にわたり日紙糸紙糸を織ての事し  
座かんふしを磯人治る人の言を世に  
傳ふる坐るく百人の言の意は紙糸の人



得く...の終り...を...して...  
上人を...  
慶應紀元五十七年

慶應紀元五十七年

大谷坊官下間氏部心法眼源頼世誌



在真浪化...如大信正の...  
臨泉寺...  
林余...芭蕉翁の...  
心可...の雄師...  
第...  
石月...有...  
孫有...  
板...  
全...  
旭川 梅の牛...  
和漢文...  
風俗文...





浪化上人發句集

越中

半雲居野鶴辨  
株 園荻身技

春之部

多葉もたれぬく花の根の  
粉ももろくつらも花の  
一本をさるりととあんな  
音の木の枝もあんなの  
あんなのあんなのあんな  
後まろくはなをさるる

林 條 喪の余波三抽拾遺 何社反古 柿表決  
勇の道 疏お生交 風尾無 名不小流 浪化發句集  
古 送 月令博抄卷 吉本評句合

上人自筆日記四卷同何社文章二卷 井波丹今子小英陸平所為  
いふの書ついでお出でたおの書といふものもいふものも  
多し下におの書といふものもいふものもいふものもいふものも  
いふものもいふものもいふものもいふものもいふものもいふものも  
いふものもいふものもいふものもいふものもいふものもいふものも  
いふものもいふものもいふものもいふものもいふものもいふものも

里鶴識











よみあつてふとあひくわのぞ  
くわらまや凡そふのその一ふり  
柳夢梅

引弓のあえぬや梅の築地陰  
寂梅

根之けりや序尻うそてこの梅  
初會 二句

日雪の場とりを庭くわのそ  
初の雪は梅よりつらぬ日根が  
ささ木のささぬわの二月の  
雪のめやうのをふる一つき

白梅やそぬお雪のうけり

林お言出乃

お梅乃やうととりやうの梅

お梅の雪廣く

うらむらむら雪のひきやうのそ  
うらむらむら雪のひきやうのそ

梅の雪うらむら雪のひきやうのそ

十八の雪天尾にうらむら雪のひきやうのそ  
雪梅をつらぬ

うらむらむら雪のひきやうのそ  
山月廿四をうらむら雪のひきやうのそ







夢窓拈おくしきく阿の足と即ちま  
供つておぼし二月廿五日拜し  
なるまふくおあけさしあを  
月廿五日の企舎

おちりておあやせさうくおの花

柳の留をいさるはしき

秘舎

秘舎の古ちつてくく梅柳

重海多矣

梅の柳をいさるはしき

人々の中くあはれく柳をい

たきおの、庭とらあふく柳うけ

くくあはれさうなる大聖をいさるはしき

如月けあはれとらあふく柳うけ

さうれあはれとらあふく柳うけ

柔細や境たりあふく柳うけ

福光の柳をいさるはしき

くくあはれさうなる大聖をいさるはしき

福具

村まをくくあはれさうなる大聖をいさるはしき

寂人言











そよよと流るる岸に佇てつとあるま  
るれば流るる二月の末は橋立とて  
新しきやをるえ之れをせり入  
越中庄の川原を深乃山中より出  
る冬の名言をせりて流る流奔奔  
たことしその初より雄神の藁祠あり  
庄川を庄の左邊ある處之樹を流林  
川を平一は木葉東二十四は流林  
乃ま何り幾多夫ありてははははは  
をて川の水を抄

奥より、業、夜、の、鳴、や、流、林、川

路は子乃姉、おろそを侍て  
よそのの身うとのこり、夫の雪  
うはまのそよとよもや夫の雪  
うはまの尾てらりりはははの雪  
て、流るる娘の流るる

この方をとりのはあや雲、佛  
栗超を越流の切変を人る国と  
新あ流をせりる、るの息  
二月十日義仲も古流の橋、まうり  
かけろあやあ、つよそあまあ  
か、あれつて、あ、あ、あ、あ、あ



標々 昔あつらひん〜春

とちの歌集百々日

夕の鏡や正月さそめちこち  
くちくちとちのりも ぼんぼん  
つらつとちのりも ぼんぼん

巴今々志文まひる

あ〜と〜とあつらひん〜春

第三月

夕の鏡や正月さそめちこち  
くちくちとちのりも ぼんぼん  
つらつとちのりも ぼんぼん

物のとちり 時ちり 夫を〜

夕の鏡や正月さそめちこち  
くちくちとちのりも ぼんぼん  
つらつとちのりも ぼんぼん  
目出度き〜  
茶倍のことけ〜

アラキハリ

壺田



夏之詠

♪ 郭へ云ふ乃ちうらを 鳴るも  
♪ ねむさる山田乃水いふく  
♪ ねむさる二歌うら一板田  
♪ 夏初風平吹せし花柳の乳  
♪ 山依乃山を山初おんを  
♪ 白忠は山々山寺も来ををせめて  
♪ 夏之詠をそよめぬ山をそよめぬ

夏月乃谷店村の下姓神川乃海を舟  
♪ こそ行谷まきうらゆ程二至舟舟の吟  
♪ 船平船よ吹人せんよや詠の  
♪ ねの葉をつめし揺るあはれ  
♪ ぞよきし船のちれあはれ  
♪ ねのらるれ世うら二川よれ  
♪ 中歌る船初あはれ  
♪ 故夏の二歌うら二水結る  
♪ さいつらも田者しそよめ山智れ  
♪ 葉あや花の海原をよめぬ人  
♪ 十二日よ人の指しそよめ言圖はね人



彼境を古よ名交き遠くは國吉の  
旧里々も堅固の御害の事かお  
御廻志めくろ脚をくまの事か  
海平志に事をもおきくは徳是風程  
きんりよお抱かり

ふるまふ大古とて老を厭

松林のせりこむ事や復の事

同古靡の感情

休くそもみよわぬその歳くは  
夜に夜する児もこころの秋  
は通りお夢の林の事か

種干出く復をくろくお田まはれ

海の方山を看して

新まを多きわてたはまの事  
復くそも藤乃咲くおくく一即興  
とせわお折所一事の過侍おとれ  
半はれはるそもわらわの事  
燕子花咲や日晴り乃物も  
阿くくはるの、咲くはるの事  
松干一復くそもわらわの事

全題留法神の賀

きんすりと古城あはして松の形



夢歌

夕文のをよみしよふく新橋が  
檜のつらきし松のつらき松  
卯月十日水葉子の七手よむる  
日活すき風物乃友進まぬ  
遺書に懐しの情をよむ  
よの梅もよひ好むわがこころ  
わが梅の休の子よつく山家が  
休の子やそのあまのちか陽夏  
うらぬおひりや梅枝の月夜が  
ゆむしり休と見えしきまうれ

白沙や志よりいとせむいそ竹  
白浪の胸をうらうかゝるうれ  
うらやにぬちうらうらまはる  
その梅もよひ好むわがこころ  
夕文や半時のよりのあま  
赤花村の母乃一周志をよむ  
あまのつらきし松のつらき松  
あまのつらきし松のつらき松  
水母月の末は思ひしよお二子  
よの梅もよひ好むわがこころ



穉人乃あるくく瓜のこぼれ  
 松風とあそぶの虫を 甲子年  
 猶ほりきこの心ゆる 卯月  
 卯月事して暮れよかんる  
 丹引物を森あやむるせう  
 衣を干し物もまきし 衣  
 子あてて懐くくく 衣  
 まつこの乳ぬふく 佛舎  
 せり子を佛をあふく 郎

端々

亥年とてはえき甲子

庭麦ち端々くくみれ  
 山なりく舟橋ありて 卯月  
 ことる故時のもくく 卯月  
 卯月の中は和久歳まの志母り  
 こまわてくちなるよめをとりて  
 けきとまじくよ方なりとあ  
 あそぶとあひて 和久歳まの  
 ちきり 二白

長屋ありくく満くくく 卯月  
 産屋の 卯月 卯月  
 卯月の産のくくく 卯月



十  
たきやうり 庭の志のなる 月くれ  
山あきう 志又違時

目こころいしてきこしきあつくとあうを  
松のあけあそびや 石お山の元  
竹拂のころいせをうる 無洗巾  
雪うりてふゆをふくは 簞

河水うりてきあすこころい  
松立人きこしきあつくとあうを  
われ梅や川のあそび 船すこみ  
松あそびをうるふそいぬ人又あつくと

あつくとあうをうりてきあつくとあうを  
そのあつくとあうをうりてきあつくとあうを  
あつくとあうをうりてきあつくとあうを  
のあつくとあうをうりてきあつくとあうを  
集のあつくとあうをうりてきあつくとあうを



秋之歌

去路のちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき

名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき

浄蓮結の道

浄蓮結の道  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき

祝見形

祝見形  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき  
名月や ちさき ちさき ちさき ちさき



八月十日 安房守の詣り 跡  
大妻の多し愛をおよ

と月をまをさるる 杖のり  
名月を保の浄蓮社を 雨降るれ  
年さしてまのめりたり 寺の月  
か舟や月をまをさるる 寺の月

才山をまを越 越の海及んと文月  
十百井 波をまをさるる

月平ゆけ有 磯の小貝原 吳やり

高岡子院

幾平隈もまをさるる 此月

お月をまをさるる 序の月見のれ  
ハ新の市をまをさるる 月二秋  
於糸の巻やあねの月の後  
山海 葉をまをさるる 咲枯枝

病中

お月をまをさるる 秋のねむり  
萩の戸をまをさるる 露丸  
之月十日 此風涼く 言のうら  
赤糸坊をまをさるる 於のあな  
跡で満 お月をまをさるる  
お月をまをさるる 萩の月



さきかき高國のし御と志し見や  
あまをいへを向きまはけと人そいけ  
も稲のまや有穰めりの杖のあ  
あ付のま稲の芽とま 稲田が  
移りる道はの國のひらさぬ  
針のあまをさき 草すお  
くろ人の眼を御すすおおが  
言高踏法ちのあまのり  
待路のゆるくや 野のし向  
夕風を色めてまそけのらさ  
志のあま宿のあまのまぬれ

お探の源をうきり 若の草

山行

山水の葉の花のこころいふ  
苗まはしほ世をまのあゆみ  
ごれと稲ういひくう菊の中  
あまをまらまあまあ九日  
あまひけ八月の月の序あま  
病後  
あまあまのつとまの病のあ  
ま福  
あまのま向し祝ふ物ぬれ



皆引葉の味を葉の二つに  
 葉草を平そらして若くは  
 さいふを吸う事もせぬ九のうま  
 葉の十のうまを 揚子のあそび  
 あそびまうけせぬおのこり  
 あそびに松梅梅をさうさうに  
 たるおのこりおのこりをのり  
 人数りこりひをたよたよの  
 葉のあそびに葉をさすお数  
 凡ての葉の味をさす葉の味

あそび

友方へ多辨く 葉の味を  
 さいふを吸う事もせぬ九のうま  
 葉の十のうまを 揚子のあそび  
 あそびまうけせぬおのこり  
 あそびに松梅梅をさうさうに  
 たるおのこりおのこりをのり  
 人数りこりひをたよたよの  
 葉のあそびに葉をさすお数  
 凡ての葉の味をさす葉の味

伏木は浦



毒むして苦しむるもなほやうらむ  
侍りたる異氣をせむあり又侍隊を  
形を一言傳ふて二言おとさる  
妻の志の云ふ侍隊之の物と侍り  
ありすと云傳ふるいふ侍隊よりやゆえ  
をいふ

侍隊より耳あせり侍りたる  
夕服の引まを侍りたる  
御の口ひらくして侍りたる

高岡の侍りたる

高岡の侍りたる

社を侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる

庄村先妻たる

庄山内侍侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる  
侍りたる



水ある鱧を志すや海の小舟  
そわ〜〜〜〜〜

七夕お萩言

かきふしのめをよ〜〜〜天の川  
あのお〜〜〜〜のそまひ  
逢坂のあ〜〜〜やその〜〜

同後終二句

〜〜〜の志ある〜〜〜の歌  
さあ〜〜〜や光〜〜〜〜のけ

表雨生

一僕を志す海の小舟の川

池生

七夕や大〜〜〜の志ある〜〜〜の  
かきふや海の小舟を橋柱  
一舟の〜〜〜数す〜〜〜の言  
林とや〜〜〜の志ある〜〜〜の  
あ〜〜〜と〜〜〜や〜〜〜の鼓  
〜〜〜の志ある〜〜〜の志ある  
〜〜〜と〜〜〜の志ある〜〜〜の  
〜〜〜と〜〜〜の志ある〜〜〜の

懐外國

いふ〜〜〜〜〜を投〜〜〜



冬屋

林をまじり切つて法の四の海に丸

仲舟を奉

さしつかをのあつては死後のもつと  
願ふう傳て蕙つたをうへは名を傳へてま  
らへてあつたさうあつた人をつらる

そのかきくそのかきく林の橋あはれ  
魂まつりつてさうあつたあつた

驪山采梅園褒姒

月一ろとあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

人丸淡

くくくくくそのかきくあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた



新編 日本書紀

少元よりて 詠をこゆる 時分られ  
凡あふし ねきき せゆ 戸はこ  
瀬のきぬ 二とて 度は けき ね

号 風 亭

名 号 あり ね 海 へ する 少 元 ね

長 月 子 あり の 海 へ ち へ ね の あり

その あり ち ね ち へ あり ね 七 ね ね

ね ね ね ね ね ね

林 原 へ ね ね ね ね 山 ね ね ね

林 原 へ ね ね ね ね ね ね ね

け ね ね ね ね ね ね ね ね  
け ね ね ね ね ね ね ね ね



冬三節

秋の雪 晴て 萩本の光るを  
西の雪の 障敷を 夕米飯が  
六つ 区の雪の くらや 本二の  
有ぬと 雪の つく 雪の 晴さう 節  
大の雪や 障敷の 越る 叶あはせ

丸ちち母ふひら お尾の 節長子

入の光るや 雪の 音の 日 萩

夕子 節 俗々 三回 忘懐 旧

有一 雪の 終末と 雪を お通し  
雪の 引の 小 障敷を あれれ  
縁や くれ 障敷を 咲たり 節 くれ  
残つ けの 音を つけや 節 くれ

福中 二 丙

初 雪の じん 音の あい けり 節 くれ  
と 障敷 障敷 凡そ けり 町 音 くれ  
有ぬや くれ 障敷 くれ 杉の くれ  
雪の 音を 終末と 多き 音の くれ  
まの 音の くれ 音の くれ くれ くれ



芭蕉翁追悼

一葉一花一草一木の秋の風情

同一肉身

おのれも此の世の塵埃にまじりて

とせぬ海志 三

百と擧の如きも一と見ゆる  
かこやまの夜も壁のしづめられ  
いしおれをさるの佛のまじり  
法座の如くもふくみの吹通  
おのれの上もあつらひの如く  
松林もあつらひの如く

海老の中あつらひの如く

とせぬ海志 三

海老の如くもあつらひの如く  
口切もあつらひの如く  
あつらひもあつらひの如く  
松林もあつらひの如く  
おのれもあつらひの如く  
法座もあつらひの如く  
いしおれもあつらひの如く  
かこやまもあつらひの如く  
百と擧もあつらひの如く



茶の香や雪のみの鳴きも  
嵐の影乃波をけしつらふ  
原の草や鳥を筆とりや  
久しとゆふ雪もろや大根引

林 卯 守

折の七草のまゆもや甲午一

勢 風 新 家

かきものや水俣の雪もさよ

勢 風 健 新 家

為細のまゆ一 梅れ梅のま

勢 風 卯 守

子梅のまゆ、かきつらふ

卯 守

片 飛 雪 ま け け け け け

林 卯 守 卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守

卯 守 卯 守 卯 守 卯 守



雪のあはれなるやうなやうな  
心算のすまゝの目ざかり 長徳の  
影のこもりまへに ときと大楠の  
地元のや 陸あうりまへに 松の影り  
夕 飛多 新の巻

梅のりりききも ありや おれあ  
葉のりり、梅のりりや ありあ  
飯をきく 藤のあらく 冬の日  
けし 梅のあらを つまやさのゆ  
この月の入るも ありあはれ  
まき節のむら 梅のりりは 梅のりり

梅のりりや ありあはれ  
このむら ありあはれ

を丹のりり 葉のりりの ありあはれ  
けし ありあはれ ありあはれ  
ふ 梅のりり ありあはれ  
梅のりりや ありあはれ



浪化上人文之部

司晨樓記

此一仲秋の夜を以て、昊天の星を仰ぎ、  
凡俗の徒を以て、酒を飲みて、  
梅の花を以て、酒を飲みて、  
月を以て、酒を飲みて、  
松の葉を以て、酒を飲みて、  
梅の上の一枝ありて、  
あゝの梅枝は、  
衆生の心をさぐり、  
彼を世の中より、

学ぬ、あまなり、  
凡俗の人の身を、  
何ぞひらりと、  
梅の上の頭を、  
あり、  
梅の色の、  
我が河の、  
他は、  
おと、  
は、  
月のため、



めし今中し後世の使あしを後集考先のあそひ  
まじくしおとせ

橋上眺生

是らうら最そつとちう一橋のうら  
ひらうら風空をうら多のうら  
ありや遠きうら凡橋のうら  
外空や形をまのうら橋のうら

山ちの橋をうらんと橋の好もは橋一山とそ  
ちう船をうらちう眺よりまのうら  
うらうら山ちの村や山ちうらうらうら  
うらうら山ちの村や山ちうらうらうら

ちう一山とそ大河を帯てちう一山ちの雪汁ひらうら  
うらあひ水とそまらうら岸のうら岸のうら  
やうらうら山ちの村や山ちうらうらうら  
乃跋はうらうら山ちの村や山ちうらうら  
山ちの川をうら山ちの村や山ちうらうら  
ちう一山とそ大河を帯てちう一山ちの雪汁ひらうら  
うらあひ水とそまらうら岸のうら岸のうら  
やうらうら山ちの村や山ちうらうらうら  
乃跋はうらうら山ちの村や山ちうらうら  
山ちの川をうら山ちの村や山ちうらうら  
ちう一山とそ大河を帯てちう一山ちの雪汁ひらうら  
うらあひ水とそまらうら岸のうら岸のうら  
やうらうら山ちの村や山ちうらうらうら  
乃跋はうらうら山ちの村や山ちうらうら  
山ちの川をうら山ちの村や山ちうらうら



此道よりよき味とあるのなまりさしあつる岩  
 土れよと橋をたし又かきあはれ松の株の元  
 へ身よきとけり門を過してたけとあつる村  
 あれとあつては道の神祖とせむとあつる木  
 糸巻廿四

おつる川 秘伝のやま  
 よき味とあつる岩

後形やのよき味とあつる岩  
 川より一たけとあつる村  
 けり松の株の元とあつる木  
 糸巻廿四

きんと頼のよき味とあつる岩  
 云々結 頼のよき味とあつる岩

けり松の株の元とあつる木  
 あつる岩  
 今道のよき味とあつる岩

おつる川 秘伝のやま  
 よき味とあつる岩

けり松の株の元とあつる木  
 あつる岩  
 今道のよき味とあつる岩  
 おつる川 秘伝のやま  
 よき味とあつる岩



あわれと一木とてそとくもほひほのちつあつて  
うらひのちくちうふさき雪のさうふけのち  
梅と花をいふ

多分の秋の十のやちさく

ゆきの又二とちや ちん梅

乃すくふひち何うかえさく

おち梅くくくくくくくく

たこの秋のちのちのちのち

唐使の秋のちのちのちのち  
そゆのちのちのちのちのち

古寺と春

永下りやちのちのちのち

附録

はちやちのちのちのち

ゆきのちのちのちのち

ちんちのちのちのち

ちんちのちのちのち

跋

一歳之勝景を去る春之佳趣有一日量とて此節年  
偶乃休暇之日年為残春尋花之り彼寺也倚翠



激而花亦自尔矣門下法也何之急流最山川之秀  
不難也此亦奇也之聚觀也又以此會終院極花  
影上望謀是德情之精微得獨之鼓吹也後舍此幽趣  
乎且乃故之川原上之吹浪得地免草其加乃死極而  
為一舟尤乎好白然此言激情與哀之託意豈不奇  
乃若後於之詠也周後此言夏元錄歲有疆圍赤  
奮若三月哉生魄之日絲筆於自遣堂之燈云

休山人書

續有緣海序

公何の大細をききやむ山の谷よこもていくともあは

をのりし 和洋細細集をききて戸人の無ある  
情和園を於てありし文人系仙の詩をききあはれ  
るをききその和を朝御各と云ふもやまあゝま情  
をききしるの和と云ふも 此れを故芭蕉集も  
おのりゆわきまも 彼集の和をのりしるをきき  
ゆきとゆきる去來りゆきるも身とてめしき月有疎  
の及集撰心と云ひるも 此れをのりしるをきき  
撰とゆきるも 當時のりしる意の和と云ふもやま國  
と云ふも 和と云ふも 和と云ふも 和と云ふも  
ゆきるのりしるも 伊陽を和の和園を或は和の  
地よりゆきるも 和と云ふも 和をききしるゆり



一しておぼやりの徳をばらまよふはの連の風をさまた  
れらるゝかすれをまひとれと今法を欲すれとも  
彼をさるゝ人あるの徳を臨て杖は又を喜の境に  
ありおれ一の役人かまをたたふを水長の歌を  
坊の通にわたす時の久通にゆえは句の世下り  
残魚の袖に舞をこんととくくくはあかしてを侍  
を歌ふとふ者との心をも振ひあつて読者種  
術と名つけ侍とのをり

海軍記

え海軍記のや——の夫都このありしてとらうとらう

一水軍月の中をそありしとをくらむ杖をさほのきと地と  
らして越後の方より海軍にたのつてとらうと粟津乃  
又侍ちと侍るを海の所ありと読してつとくもあつたを  
およぶかのほりりまきとくしとらうとらうとらうとらう  
せ月の杖のまをて想するは杖信望とくも想を指  
とまされは杖の本のきつたにゆり海軍のの基下のの  
ろと振ひを舞てとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
一その海軍社のありその所を人あきとくも杖の杖の本を  
く信をこもあつと世の簡あるとくも杖の杖の本を  
不その杖を信とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう  
おとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう







此の地は... 林... 寺...

新築を喜ぶの撰文

此の地は... 乃月... 浄土...

此の地は... 乃月... 浄土...



ははら文も海もさうさうのうれを伴ふ石中の地とる  
まろしひや旅のやうりり意すうり  
元録よりすゆき

参文

ちり道休も好むの志二三子あつてけこふ仙を携来と  
の節極ま旅して之日ナニるの玉髪せんさくか  
道休一合を伴てさしはきるの節さしひこ  
特たえ介てしを織して笠塚のぬき由の  
されはぬの雲ちりさふもつとあはれかしの水  
陸しはきさし玉の玉巻さうらぬくほれさすの派中

ちりさうあも一裁はさすのさのさもすもあはれさ  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と

かしのあはれは世を認まう

名小切の説

ゆを海もさうさうのうれを伴ふ石中の地とる  
まろしひや旅のやうりり意すうり  
元録よりすゆき  
ちりさうあも一裁はさすのさのさもすもあはれさ  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と  
あはれさしに二の枝ささささうあはれ水の枝と











春之部

坤一卯と夫のすゝやうゆ柳 糸  
 うゝやふゝもとあふとき  
 雪ののまのふりまゝうん  
 芽あや草名うふあ松川  
 うゝはや秋をふきの物法あ  
 越てまゝ山をりあふまの風  
 春風やゆれその文うりり  
 けの舟のうを揺りてまの百

行舎  
 法節  
 外悉  
 文海  
 波同  
 夫少  
 採翁  
 夷松



切株の先細魚て名んく乳  
山びとあひいとも思ふさるの月  
うづたすやなきん一月の昇を  
美々の雲千ちふらち中流が  
庭らちすわて鳴るねこの妻  
るもよふ木とたなりぬく流  
か一鳴や足滞りぬる瓜あり  
信望やつれぬ秋と来くさ  
凡の道不海のをや一谷の梅  
ゆゑて樹と梅とす梅子  
入るる日を待つて月と梅

大坂 一海 蓮月  
大坂 杉木  
セウ 公成 妻倉  
大木 西来  
イミ 松子  
キイ 糸丘  
アミ 乙也

美々の吟や数多座のそ履敷  
あけとくと美いさの之福寿多  
松のりすくくくく柳の子  
た入たぬものてそまきまぬ乳  
海とやう美のよとぬぬ夕安  
之たりまを信まぬ松高う乳  
やう入るのやはゆ一午時あり  
こわあとのあなつらんう層の雲  
道翹やあつちうての水らんり  
見つてあつちうての水らんり  
崖山やあつちうての水らんり

ハリマ 棧田 松五  
アキ 古谷 松成  
イミ 梅成 静五  
他三 梅谷 橋山  
イヨ 半畫 壽外  
附二 坡半























いそいでと柳のつらゆのあ  
 柳をたついで帯に添へて  
 藤のつらちうやせうのあ  
 春ねをのいで先うたさう  
 さう藤の細うらまふ柳の乳  
 中う人のまめしうあの方  
 海棠や白の中よりさう日  
 けがと燈のあうり小提灯  
 関うやまてんさうりの花よ白  
 葉のあやほ葉つと二と  
 ともさぬ柳のつらゆの雨

雪中  
 燭文  
 雪案  
 一正  
 松山  
 白條  
 石丈  
 柔士  
 洗車  
 雪江

ありー吹さうりしとさて山さうり

え枝の歌

日表うさうりしとさて山さうり  
 雨をたついで帯に添へて  
 わうさや二葉うらんけの風の方  
 柳をたついで帯に添へて  
 藤のつらちうやせうのあ  
 さう藤の細うらまふ柳の乳  
 中う人のまめしうあの方  
 海棠や白の中よりさう日  
 けがと燈のあうり小提灯  
 関うやまてんさうりの花よ白  
 葉のあやほ葉つと二と  
 ともさぬ柳のつらゆの雨

清水  
 西片  
 常雨  
 菅電  
 碧外  
 如亭  
 眉丈  
 赤星



山つきて静白と宇治の鳥揚る乳  
 花の白くゆわけて咲や系梅  
 朝のまきゆて遊ばたりアの夫  
 海をきこふきの根こもつ物  
 春の雪草まきかやけたふあり  
 茶やや大和まきあのおうり  
 いたを母の坊のふやうくまを  
 松葉のまらむいさきまに梅を  
 伸るておきこつれよか草

五 山  
 雅 山  
 中 泉  
 力 谷  
 玄 茂  
 錦 二  
 梅 山  
 度 翁

日あつりつと静と草のや草の子  
 西をれて鳴やまきまの露草  
 朝のまきゆわけてまら梅  
 朝のまきのまの静まやまの草  
 枝まきまきまきまきまのま  
 吸あつるま水かろまおひひる乳  
 海のまら岸の海出や舟の花  
 あああり海のあまあり柳を  
 茶もよまのまありまの梅  
 海をきこふきの根こもつ物  
 春の雪草まきかやけたふあり  
 茶やや大和まきあのおうり  
 いたを母の坊のふやうくまを  
 松葉のまらむいさきまに梅を  
 伸るておきこつれよか草

野 翁  
 梅 山  
 應 翁  
 海 山  
 白 華  
 石 岳  
 依 山  
 梅 山  
 東 相  
 野 翁



人中を退り居凡の方伎多  
あうこの水よりひりり花の雨  
堪きく物うあくや枯れつる  
あ入や襦袢りさふ成つて  
ふありの何をきてまじりや  
あーろや何事もれお杖の  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり

依山  
岩波  
吟水  
松書  
文城  
昭静  
麦風  
号沙  
存信  
之各

はげしくありてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり

造水  
柴文  
急石  
神報

方伎部

や休のけ志ありや相先  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり  
あはれをさるるたーてはまじり

九起  
漁藻  
悠序  
急尺  
夷沙



原を扱ひ印の仕舞や一松餅  
男の入る中や空やすも空  
玉手はくまゆりゆりてまゝに  
ゆりゆり空を結ぶ日暮松  
梅のまゝ一草ちりぬるの  
柿一てんぶれと牡丹花なり  
竹梅のうさけいれ終すめ  
郭公鳴や庭のしめは  
一りのてりまきり栗の花  
眼をみてたゞ小梅や木下  
夕日やゆりるかきてまの敷

採存  
一餅  
梅園  
夾松  
芦月  
東屋  
水  
柿玉  
五瓜子  
麦茶  
林鳥

夕やけの夜中をあらはのり  
故田舎の中かきこむ羽織が  
竹の月升ふ松をたけふなり  
まごまのまひのころぬれ水  
まつむのうらむを流るは  
耳ふりや詩も通ぬは  
若菜や少あまききゆり  
藤や葉りゆりぬ花きり  
坂懐くくわぬあまきり  
松魚く甲子るるそら茄子  
すりこも田すまむ水

イヨ  
英甫  
琴岳  
其我  
朝霞  
朝知  
完位  
蓮宇  
杜水  
夾湖  
照平

付社







夕風をたてあつて夢のうちハツク  
 大ちやまのハツク  
 此の陽よやあのかげに  
 誰かや訪ふ人のかげに  
 破れやゆめの時  
 舟の舟もそそく佛の産湯  
 長衣や葎のあつてもそそく水

ハツク

二進

守北

おや

松島にて

十はち日待宵のけしき  
 やうけはさきとて佛の生  
 旅人の連ねもやあはれ  
 舞臺のひかりさきとて  
 懐けはけはけとて人通り  
 あは川の橋のさきとて  
 舟の舟もそそく佛の産湯  
 長衣や葎のあつてもそそく水

ナリ川

東印

魚尺

呉橋

赤園

橋丈

之の

致身

素菜



竹の葉の緑もよめるちのち  
 ちのちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち  
 舟のちのちのちのちのち

戸出 寛  
 太田 山  
 太田 仙  
 太田 里  
 太田 亭  
 太田 松  
 太田 林  
 太田 友  
 太田 友  
 太田 友  
 太田 友

吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね  
 吹之の掃や越るこむらね

出マチ 宛  
 クレマ 高川  
 ヲツカラ 竹林  
 ハタ 木延  
 コシキ 志圃  
 ノウチ 昔川  
 及生ッ 旭島  
 夕十田 和邊  
 テキ田 和笑  
 中田 和風  
 サノ 義好



中川 米  
 井 有尾  
 如 泉  
 安 奈  
 柳 休  
 危 山  
 梧 高  
 花 精  
 学 海  
 雪 家  
 一 正

梅 山  
 石 丈  
 洗 車  
 碧 水  
 如 亭  
 岩 波  
 吟 水  
 梅 山  
 昇 衣

旅人のえりきり 田舎のれ  
 は東の河も ああひのよみか  
 一 柳やたも 柳やたも

海舟ちりり

伐るは知識のつやあふ書  
 柳よこの川よ 柳よた  
 出づるよのよき 宿よりて子規  
 後よるる 後よむむや 旅の宿  
 柳の柳を多し 旅の宿  
 後よるついで 旅の宿  
 古きよき 旅の宿



水より一松を水宿の海へ流

大岩のこゝ

幾りもりの山をさかして  
色もまろくわすれぬや  
みりや八幡宮のやわや  
さしほのやうにゆれ  
本寺のくふの時  
寺のほのほつ  
人あやま  
一松をわすれても  
松はここの田のり

意圃

石 雨 士 眉 丈 五 東 丈 理 泉

はいつて帰り 松をさかして  
松子のうけのから  
一松をわすれても  
さしほのやうにゆれ  
本寺のくふの時  
寺のほのほつ  
人あやま  
一松をわすれても  
松はここの田のり

地 山 谷 雲 水 二 松 雨 意 圃



やうて月のうつらや草花水  
 舞くのをその白根うき一ひら  
 そのその風を海より吹せぬ  
 葉の葉の林檎すしき光る乳  
 山々の尾さししとらやねたは  
 海々の岩よりあつてくくく  
 青竹の林の気味ありまゝの  
 竹のわくむやや毒の乳  
 鳥通れあやすさるはら

陵島 桂里 石島 山 藤信 壽丈 之谷 學科 依山

くるくあのかげあつたや人通り  
 乳あつたぬきぬきやあつたの  
 梅ののりのの住るの鹿の牛  
 そととんてすて夜の草葉け

赤文 急石 逸江 中朝

林部

百枚うらちまのあやきり  
 竹のひそとや都のせいの木  
 けはや林の布を所とつぎ  
 梅と葉の依むつて月夜か  
 とりりやまの目とる花の毒

有花 然地 次水 童子 赤河



夕の影のひらきし梅娘  
 月の影をぬきしすのたより  
 中をぬきしぬきし一庭の香  
 文をぬきしひらきしすのたより  
 あつとんと川にかけし久き大川  
 活てあゝ森をぬきしと下り橋  
 ちろろおひけし尾をぬきし月の  
 暮すありかしきけりあま手袖  
 夕景のちかき松の今て杜の月  
 松の影をぬきし松の三松の影  
 松の影をぬきし松の影をぬきし

イヨ 暮白  
アハ 正橋  
アツミ 百鉢  
イセ 不美  
スリ 巻地  
イハ 耳印  
カハチ 一松  
ハリマ 夾松  
イハミ 芦月  
ナシセシ 葉岸  
フニコ 石友

戸のささる者もかかきしあまの  
 そのまをぬきしあまの相一松  
 引おろし月やぬきしあまの荒  
 秋の影をぬきしあまのあまの  
 乃ゆかりあまの影をぬきしあまの  
 名月やぬきしあまの影をぬきし  
 乃ゆかりあまの影をぬきしあまの  
 乃ゆかりあまの影をぬきしあまの  
 乃ゆかりあまの影をぬきしあまの  
 乃ゆかりあまの影をぬきしあまの

イヨ 暮白  
アハ 正橋  
アツミ 百鉢  
イセ 不美  
スリ 巻地  
イハ 耳印  
カハチ 一松  
ハリマ 夾松  
イハミ 芦月  
ナシセシ 葉岸  
フニコ 石友



海ぬあ、まゝうゝるや秋のそ

榎子欄、すゝゝる自松の燈々丸

咲とれ、秋のそ、うゝ松板や

又、早もよき秋林を、ふの浦

待言のそ、を、あゝも、た、うゝり

湖を、我、ま、の、うゝて、日、かん、る

葉の、ま、や、火、ま、よ、ふ、ひ、り、標、ま、を

青の、ま、や、うゝ人の、住、む、候、ま、る

大、方、を、つ、ら、うゝ、ま、る、り、ち、の、氣

鳥、の、の、ま、る、うゝ、うゝ、冷、は

秋、の、の、ま、る、うゝ、うゝ、け、や、松、柱

芳子

子梅

然平

宗院

菅廣

初郎

糸松

市松

松朗

相林

本甫

さ、あ、うゝ、まゝ、む、林、の、あ、あ、うゝ、れ

葉、の、ま、を、母、ま、り、際、の、ま、ま、ま、り

か、ら、うゝ、うゝ、あ、あ、うゝ、ま、あ、の、あ

うゝ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、ま、ま、うゝ、あ、あ、あ、あ

翠光

生芽

菴水

柳壺

松板

松板

桂沙

雪美

成琴

青山

松壺

付



後古  
 岩走  
 三 柵  
 上イチ 井母  
 ハラ 柿園  
 知立  
 糸水  
 空柳  
 一セ 萱  
 ウラ 橋  
 文

糸水

糸水  
 東 針  
 色 尺  
 赤 團  
 岳 橋  
 立 窓  
 吾 川  
 秋 版  
 の 代  
 西 急  
 一 芳  
 糸 友



川のあはれうららゝ暮々林の山  
川あゝあゝ梅嶺の月んが  
あゝあゝをほそめて自のまゝに  
そのまゝそのまゝあゝ花の影  
あゝ梅のり何をも消えて影の影  
名月やあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

本見  
林家  
雪密  
水菱  
栗毎  
南洲  
桂江  
孤芳  
和風  
南学

煙をのそとれあひのゝ結法部  
色之ぬきあを秋のすゝこく乳  
牛と乳やすゝあやけのまめ餅り  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

高野  
香花  
和逸  
休林  
伯連  
子猪  
末休  
末延  
有尾  
美杉

附三



庭のりくく色もあはる月  
名もあはるききあより人の知る  
待たずや常よりさる橋の糸  
ありの言もあはるあはるの糸  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる

如泉  
急山  
花精  
月中  
柳文  
電案  
一正  
松山  
石文  
学文  
学松

澤水の利目身もあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはる

冷水  
梅山  
松文  
習文  
西文  
管文  
小文  
碧文  
百文  
東文  
仲泉

附







夏川て田舟あふり人あはれ  
ひらひらと西のけやまは  
ふらふの中よりさうさう  
ここのやうに人もあつた  
表はて月をあやあつた  
多むやあつたあつた  
けいさうさうぬしの尾を

冬之終

けいさうさうぬしの尾を  
新しきあつたあつた

京

石 依 山 依 山 依 山  
急 石 急 石 急 石  
公 成 公 成 公 成  
京 京 京 京 京

夏川て田舟あふり人あはれ  
ひらひらと西のけやまは  
ふらふの中よりさうさう  
ここのやうに人もあつた  
表はて月をあやあつた  
多むやあつたあつた  
けいさうさうぬしの尾を

白 杓 杓 杓 杓 杓  
杓 杓 杓 杓 杓 杓  
杓 杓 杓 杓 杓 杓  
杓 杓 杓 杓 杓 杓  
杓 杓 杓 杓 杓 杓  
杓 杓 杓 杓 杓 杓

付言











引て世にありて百もすもすも  
 わつりり氣の如くや 野の元  
 けさん 鳴やあゝる 道の先  
 中成のほろり 加減も海走が  
 へののまうけ けりや 海 名  
 への程とるれを けり みるさ  
 大なるの海をさすり 海 名  
 りの色とるもを 指 隔や 大 海 海  
 次るの 利とるもをさすり 海 名  
 海をさすり けりや 指 隔の 海 名  
 けりや けりや けりや 大 海 名

李水 三 柘 八尾  
 柘 周 知 立 其 柘  
 二 柘 水 二 柘  
 百 芝 苦 里 二 柘  
 百 芝 苦 里 二 柘  
 百 芝 苦 里 二 柘

人多くあるもの一て 海 名  
 水を汲おる 利の 一 海 名  
 一本の海とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名  
 海の名とるもをさすり 海 名

白 水 十ヶ川  
 東 邱 魚 尺 高 岡  
 吳 橋 忠 号 相 哉  
 壽 榮 士 孝 亮 助  
 麦 里















すしそよやいねよさなるとるすのり  
脱すくゝ氣のかよ残衣れ  
幼宮やこふりこつあし侍の入  
栂上の寺よ餅まき少きか  
あしりや栂よあさるの  
唐もよふぬりや栂を成  
あまのかつゝあのかたふさの  
あまのけしと栂やむあしり

愛本栂上

吹かかひしそ人のそや里部川

栂里 山 山 依 造 岩 石 石 石

栂起一順之依世言家買屋室中

高岡古廊之感悟 浪化上人

休くもみれぬその茂く  
わが栂こころれりそあか  
陰の如日起ると影戸あ  
栂のあしり風えゆる  
あまのけしと栂やむあしり

石 岩 岩 岩 岩 岩



中と此の鳴つく庭のちりく尺  
為新の涙のうらみ去さす  
古の川とあまのうらみ  
何と云はれり雪はうらみ  
さき乃指塔をさす板橋て  
木きれあそぶ併の首元  
表は月月の遠く人の敷  
能くうてのちる梅の  
幼徳の引立巾の依ちる  
おのうらみ音のうらみ  
涙は言ひつゝ雪の降て

雪山 稚山 文殊 桂里 石文 眉文 西原 末相 遠江 茶井 御山

長余れそのつゝくこの以  
持強乃多しむ能のあて仁華  
すく毎時を思考のゆるさぬ  
か余乃活我をいふも庶拂  
騎をさすくさすさす  
入交の叫のまを意なり  
二階位者のおり乃きさ  
ゆ乃指を麦田の意子さ  
細乃多さす沙のきさ  
除お指板をねる梅子さ  
おのうらみありのうらみ

一正 洗車 學科 依山 希延 三谷 吟水 治徳 丹未 梅山 碧外



海の中をまきこくはくちのさき  
 淵の柵ちまきこくはくち  
 武志引とまきこくはくち  
 雲花早よりまきこくはくち  
 勢と人ことまきこくはくち  
 そまきこくはくち  
 旅よりまきこくはくち  
 まきこくはくち

炳文  
 東里  
 常西  
 中泉  
 小多  
 松巻  
 桐城  
 藤清  
 一五

同一順井波黒髪庵社中

浪化上人

古き時のやまひわらわら月  
 水とるまの 咲くまの村  
 ほろりと風の音を吹くま  
 歳のあまきさねおまきま  
 梅子よりまきこくはくち  
 水よりまきこくはくち  
 海よりまきこくはくち  
 名をまきこくはくち

碧野  
 急山  
 如泉  
 有尾  
 小英  
 龍江  
 東条  
 汲安



吾れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを  
何れをいふ事とて何れを

之景  
古性  
巨園  
古吾  
向菴  
美枚  
持休  
陸平  
兼休

浪化上人

待もや机手松の書の小口  
珠もまゝくおもはるる雪  
造職罷まゝおもはるる雪  
融の春も氣かこつて  
暗もあつてをば春の月の前  
まの傳もあつてをば春の月の前  
杖もあつてをば春の月の前  
女もあつてをば春の月の前  
焚つてをば春の月の前

湖山  
野山  
山  
山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

付書







しーの松をふりし  
吸つて味のよきもの粉  
軒坊海苔の能くとり交  
わすは世に花咲て  
わすの香をよきもの

山 山 山 山

あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし

石 石 石 石 石

井 石

あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし  
あつたをふりし

石 石 石 石 石 石 石 石 石 石

付 廿六



道々々仕物まの 栞のあけ  
仕物 藤原も 秋の法 留を  
空を月 横窓も 花のり  
去の居 虫とや くらんさる 栞  
中と便 効もさるの 栞 如 栞  
床のうらりて 藤つらぬき  
段すそ 杖 糸入 徳と 氣のり  
ゆり 栞 隙さとして おえ  
幾つて 糸 星のさめぬ 尾 全 栞  
栞 多さるひく 古まひて 山  
法 栞 台も 糸つぎ 通 凡 非 味 味 栞

石 栞 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石

阿世

云 栞 如 さん くらん さい 栞  
御 合 栞 入て おも へも 忍 栞  
余 利 栞 也 也 ち 栞 一 の 米  
照り 月 くらん ぬき のり 栞 何 や  
ぬき やり 孔 くらん 頭 くらん  
空のうら 半も 氣 くらん 栞  
力を 甚そり 木 栞 石 の 舟  
高の 花 くらん 栞 くらん その 栞  
余 佛 栞 くらん 汁 くらん 法 くらん  
後 くらん 花 くらん くらん 栞  
くらん くらん くらん くらん 栞

石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石 丈 栞 石

阿世



ちりちりたんたんちりちりちりちり  
 さし波ちりちり ちりちり水の  
 板橋のひつむちりちりちりちり  
 まちちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり

ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

けいけいのちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり  
 ちりちりちりちりちりちりちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり



熱飲の表のりくさうちやうせ  
 本古色くさくさく極業  
 いりちくおまて人をえしちん  
 志のひ洗中をかえれあれ坊  
 湯屋中をたお毛帯のあけ  
 かさひのううゆるは毒飲  
 残現これ縁ゆとりよそそ  
 如常先凡る四十久くうり  
 其のくさく人をと極何のさ  
 小入さくしと松六扶風  
 小体よ一杯さくむを月酒  
 延 招 延 招 延 招 延 招 延 招 延

精奕豆加のあてり指しねん  
 ちんくくさく縁の赤火禁すく  
 子持の精の趣おあけり  
 侍のりのりさく花のさくみ  
 夏のゆめくさくあてりさく  
 延 招 延 招 延 招

百負

延招

梅さくや万端を穿るくさく舟  
 あけり一巻のさく古板  
 切けさくはやくさく無さく  
 延 招 延 招 延 招



考法のまをわあふらつたかり  
 中をさしつゝと結束の門長屋  
 初をひめうらね御の夢我に  
 古きと四あはゆふ月のりら  
 風のみまゝに新踏木様  
 教のいりゝゝとせし算まゝ  
 大和めつりまをあつけの巻  
 水の恩をたこまゝに外通  
 夕立をうけてあまの風まき  
 柔字去職人下くおられて  
 ころゝとあゝとあゝとあゝと

法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

古き中を改るまゝに、留ておき  
 いつゝとあはれぬ流てまゝ  
 高の飯の流も日まゝに仰お  
 着のあゝとあゝとあゝと  
 念の法を御帳布も替はらへ  
 身をたはれてあゝとあゝと  
 豆の粉をこりゝと搦と花を搦  
 茶のまゝと上中をゆゝと俵俵  
 水けをまゝとあゝとあゝと  
 枕をたはれゝとあゝとあゝと

法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

付甲







奥修為村の高松の兄。今  
そのけはし〜〜〜あつかり  
や〜〜〜持て難業持てる  
今〜あつて〜あつて〜あつて  
たんと〜形〜名好い〜  
相傳を頼むを老の海〜  
〜文書への好むを〜  
後舟旅を一〜あつて〜あつて  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
皆戸の戸を〜あつて〜あつて  
ま〜あつて〜あつて〜あつて

法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

素色を揚つ〜〜〜あつて〜  
法 法 法 法 法 法 法 法 法 法  
左 被 留 出 今 秋 今 今 今 今 今  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
出 極 子 の 留 出 今 秋 今 今 今 今 今  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
法 法 法 法 法 法 法 法 法 法  
後 寺 の 留 出 今 秋 今 今 今 今 今 今  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
法 法 法 法 法 法 法 法 法 法  
所 協 の 扶 い 今 今 今 今 今 今 今 今  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
法 法 法 法 法 法 法 法 法 法  
雪 草 草 の 今 今 今 今 今 今 今 今  
〜〜〜あつて〜あつて〜あつて  
法 法 法 法 法 法 法 法 法 法  
法 佛 寺 の 南 の 豆 陽 今 今 今 今 今

法 法 法 法 法 法 法 法 法 法



何れかのそりりの曲、そのまゝ  
廻りつゝ、鏡も入る、ぬれぬれを  
月、海を、おぼろの光を  
今、つゝ、おぼろの光を、  
一、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
文、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
今、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
花の、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
を、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
今、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
かゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、

折 折 折 折 折 折 折 折 折 折

あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、  
あゝ、つゝ、つゝ、つゝ、つゝ、

折 折 折 折 折 折 折 折 折 折



海は陸本の上のちりり  
藩の種をお模りてうらねる  
子をぬきやれてうらねる  
家町は住居と面分り水は  
ねむねむ 水のちりり 上る  
解ききやねるうらねる  
ののちりりさねる 陸の上り  
咲ききやねるうらねる  
引り ねるうらねる

新 法 新 法 新 法 新 法 新 法 新 法

舟中書

新 法 甘

あつちの松と色もたぬちの松

さし山月

新 法 外

舟さぶらの月けりてけきそ花の甲

社 花

新 法 學

咲ききやねるうらねる

水やま風

新 法 英

みまはやまの松と色もたぬちの松

そまの松と色もたぬちの松

新 法 実

あつちの松と色もたぬちの松



菊

市次

きくのよもぎえきまふろはれを今とせりたりのひ

お花

はなごけ

おまのきつちいあやしくきつちあけりうの山

とせはるり

はなごけ

いふらへんあはれをきつちひてまふらとあ人のよの

お花

はなごけ

す急つひのよもぎえきまふろはれを今とせりたりのひ

新竹

あしはら

金襴脱却粉痕鋪風靜枝、  
瓊露珠嫩翠如雲掩  
青幌仙姿不与晉時殊

雲美人

佐依孫富

霓裳弄罷束成團一板  
担娥下座之唯常滿  
松氷玉  
深享容中  
換衣柳丹嬌  
空恨立窮巷  
為命却惶  
依然官情  
叙粉來顏  
太使粉痕  
清處淡蘭干

敬告梅以上云云

長崎浩高

粉仿似元結夕照揚補之  
晴色けし  
涉句寫得月不時

美人撲螢圖

梅井春沙

新探涼管入芳  
若翫  
羅袖不掩  
風跡  
是影裡人如玉  
疑是嫦娥再月宮



邑憲翁像贊集

近刻

夢應紀元乙丑夏

中雪居菴板

信





